



館長だより

山形県産業科学館

令和7年12月11日(木)

発行 館長 加藤智一

ダモクレスの剣



1961年 国連総会でのケネディ大統領の演説では「地球のすべての住人は、いずれこの星が居住に適さなくなってしまう可能性に思いをはせるべきであろう。老若男女あらゆる人が、核という「ダモクレスの剣」の下で暮らしている。世にもか細い糸でつるさ

れたその剣は、事故か誤算か狂気により、いつ切れても不思議はないのだ。」と、冷戦下の核兵器の脅威を「ダモクレスの剣」にたとえて述べています。また最近では、ある大企業のCEOが、莫大な報酬と権力を持ちながらも、企業経営のリスクを「成功の座は常にダモクレスの剣の下にある」などと述べています。「ダモクレスの剣」とは一体何? 「ダモクレスの剣」の出典は、古代ローマの政治家・哲学者 キケロ (Marcus Tullius Cicero) が著した対話篇『トゥスクルム対話集 (Tusculanae Disputationes)』 第5巻にあります。

紀元前4世紀、シチリア島の都市シラクサを支配していた僭主ディオニュシオス2世の宮廷に仕えていた廷臣にダモクレスという者がおりました。ダモクレスは王の権力と榮華を羨み、「王の地位はなんと幸福なことか」と称えました。それを聞いた王は彼を宴に招き、自らの玉座に座らせました。しかしその頭上には、馬の毛一本で吊るされた鋭い剣がありました。ダモクレスは恐怖に駆られ、王の地位が常に死と隣り合わせであることを悟ったと言います。

この逸話から、「ダモクレスの剣」とは、「権力者は豪華な生活を享受しつつも、常に暗殺や反乱の危険にさらされている」とか、「富や名声を得ても、それを維持するためのプレッシャーや脅威が付きまと」うとか、「誰もが幸福の只中にいても、予期せぬ危険が突然訪れる可能性がある」とか、「栄光と危険は表裏一体」であることを示す格言・哲学的教訓となりました。

「ダモクレスの剣」という格言は、古代ローマの

政治家・哲学者 キケロが著した「トゥスクルム対話集」以降、中世ヨーロッパではラテン文学を通じて広まり、ルネサンス期以降は「権力者の不安定な立場」を象徴する比喩として定着しました。現代でも「ダモクレスの剣」は、政治・経済・日常生活における「繁栄の影に潜む危険」を表す格言として使われています。繁栄の中に潜む危険を忘れるな という警告の格言です。王の玉座に座るダモクレスの恐怖は、現代の政治家、経営者、芸術家、そして私たち一般人にまで通じる普遍的な教訓を与えています。リスク管理の重要性や謙虚さの必要性、そして安全の幻想を疑う気持ちなど、成功や幸福を享受する時こそ、その背後にある危うさを意識し、謙虚さと慎重さを忘れるなと言っているわけです。

オオバコの種の適応戦略

山尾僚 京都大学生態学研究センター教授、澤進一郎 熊本大学教授、石川勇人 千葉大学教授、および名城大学農学部、森林総合研究所、理化学研究所環境資源科学研究センター、琉球大学熱帯生物圏研究センター、静岡大学農学部からなる研究チームは、オオバコの種がダンゴムシの卵に含まれる化学物質（トレハロースとアブシジン酸）を危険信号として感知し、発芽を一時的に抑制し、ダンゴムシが活動している晴天時には芽生えを避け、雨で卵が洗い流され、ダンゴムシの活動が弱まるタイミングで安全信号に切り替わり、発芽を再開する仕組みを明らかにしました。

従来、植物の発芽は 光・温度・水分 といった物理環境に応じて調整されると考えられていました。今回の研究は、動物由来の化学刺激（卵）にも反応するという新しい適応戦略を示したものでした。これは「種子が植食者の存在を化学的に感知し、まるで種子が敵の活動状況を読んでいるかのような高度な生態的戦略で、発芽のタイミングをずらす」という、植物と動物の新しい相互作用の発見です。

